

続・ 珈琲の思い出 28

鈴木優子

店を出ると、和樹がニコニコしながら優子を眺めている。

「どうかしましたか？」優子が訊くと、

「ほら、バッグを貸して下さい。僕が持つてあげますよ。」

「いえ、大丈夫ですよ。軽いですから。」

「いやいや、いいいんですよ。ほら貸してください。」そう言って、優子が左手に持っていたバッグを和樹が半ば強引に奪って、自分の左手に持つてしまった。

・・・と、「はい」和樹が自分の右手を優子に差し出した。「優子さんと手をつないでもいいですか？」

なるほど、これがしたかったのか。

優子は半分あきれながらも、「はい・・・」と頬を染めてうなずいた。

和樹のごつごつした手が優子の手をそつと握ると二人は歩き始めた。

「・・・何!？」

優子の手をただ握るだけでなく、和樹の指が優子の手をまさぐりはじめるではないか。

優子の手のひらを軽くくすぐったかと思うと、優子の指を一本ずつ丁寧に指先から下になぞっていく。そして指と指のつけ根を爪の先で軽くひっかく。(続く)